



特集

マラウイの現場で生まれた共感が、
 新たなパートナーシップへ。

— 豊田通商が ISAPH の活動に共感し、車両を寄贈 —

News Letter

2025 年
 11 月 30 日 発行

第 52 号



マラウイからの報告

マラウイの現場で生まれた共感が、新たなパートナーシップへ。
―豊田通商がISAPHの活動に共感し、車両を寄贈

ISAPH マラウイ事務所
 萩原 愛美



ISAPH 事務局
 村上 麻友子



ISAPH新車両とマラウイのお母さんたち

現地の人々の力を引き出すための伴走支援

2025年8月、トヨタグループの一員である豊田通商株式会社から、ISAPHのマラウイ事務所に新車のピックアップトラックが寄贈されました。

この寄贈は、ISAPHが長年マラウイで続けてきた「現地の人々の力を引き出すための伴走支援」に、豊田通商が共感してくださったことから実現したものです。

一台の車がつないだこのご縁と、その背景にある現

地での取り組みについてご報告します。

ISAPH マラウイ事務所は、地域の人々が自らの力で健康を守り、栄養状態を改善できるようになることを目指し、現地の人々の力を引き出すための伴走支援を続けています。

栄養不良や貧困の中でも、お母さんたちが自分たちの知恵と地域資源を活かして子どもを育てられるように。現地職員は車で村々を訪ね、現地の保健ワーカーや母親グループとともに課題を見つけ、行動し、学び合いながら、地域の中に変化を起こしています。

「ありがとう」を届けたくて

この活動を長年支えてきたのが、トヨタ自動車株式会社のピックアップトラックです。現地では「Janet (ジャネット)」と名付け、ぬかるんだ道も砂煙の中も、時には病気の子どもの病院まで運びながら、村々を駆け抜けてきました。

過酷な環境の中で修理を重ねて使い続けてきましたが、ついに引退の時を迎えます。これまで現地の人々から受け取ったたくさんの「ありがとう」を、車を製造してくださった方々にも届けたい。その思いを込めて、車のメーカーであるトヨタ社へ手紙を送りました。



悪路を進む Janet



マラウイの活動地で行われた納車式の様子

思いが届き、共感が生まれる

思いがけず、その手紙がご縁となり、豊田通商の皆さまがマラウイの活動地を訪ねてくださいました。

現地では、自ら材料を集め、ISAPHが伝えた離乳食づくりを地域の力で続けているお母さんたちの姿をご覧になり、「物やお金を渡すのではなく、現地の人々の力を引き出す伴走支援」というISAPHの理念に深く共感していただきました。

豊田通商の方々もまた、「WITH AFRICA FOR AFRICA」という考えのもと、アフリカ各地で生産や整備の人材育成に力を入れておられます。

同じ方向を見て活動する仲間としての共感が生まれ、「お母さんたちの笑顔が素敵ですね。我々にも何かできることはありますか？」という言葉がきっかけとなって、新車の寄贈が実現しました。3年間の無償メンテナンスも付けてくださり、マラウイでの活動を力強く支えてくださっています。



TICAD9 プレイベントにご招待いただきました

新たな仲間「Mphatso (ンパツツォ)」と、これから

8月上旬、南アフリカで組み立てられた新車がマラウイ事務所に到着し、納車式が行われました。新しい車は、現地職員の提案で「Mphatso (ンパツツォ)」と名付けられました。マラウイの現地の言葉で「Gift

(贈り物)」を意味し、「授かった恵み」や「神への感謝」の思いが込められています。

20年以上にわたるISAPHの歩みが共感を呼び、理念を共有できる新たなパートナーと出会えたことを実感する、温かな式となりました。

この出会いをきっかけに、9月には日本で開催された豊田通商主催のTICAD9（アフリカ開発会議）プレイベントに招かれ、ISAPHの活動を紹介する機会もいただきました。

聖マリア病院の谷口院長も同行し、地域に根ざした支援のあり方を国内の方々にもお伝えしました。

アフリカで生まれた共感の輪が日本にも広がり、ISAPHの活動に信頼と関心を寄せてくださる方々が少しずつ増えています。

これからも、現地と日本がそれぞれの立場から支え合う国際協力の輪をさらに広げながら、地域の人々の力を引き出す伴走支援を続けていきます。

医療者が変わる、地域が変わる —ISAPHが育む「行動の循環」

ISAPH ラオス事務所 三浦 夕季



ラオス農村部では、医療施設があっても見えない壁のために医療を受けられない人々がいます。道路や交通の問題に加え、家族の許可の必要性や伝統医療の慣習が受診を妨げ、命を落とすこともあります。ISAPHは、こうした人々に寄り添い、医療者とともに行動の循環を育む支援を続けています。

緊急医療支援と現実

そのような中、郡保健局から命の危険にある乳児への支援要請がありました。体重1,600グラムの乳児の命が危険にさらされていたのです。家族には入院費の準備がなく、約1カ月が経過し、児は衰弱していました。ISAPHは、児の命と両親の意思を尊重し、iサイクル支援*を含む寄付金を活用して支援を開始しました。しかし搬送準備中、両親から「入院には祖父母の許可が必要」との連絡が入りました。命の危機が目前に迫っていても、経済的な支援だけでは受診につながらない——その現実を痛感しました。



衰弱した乳児

救うから防ぐへ



授乳方法を練習する母親

家族への説明後、翌日には入院ができました。治療の結果、体重は1,600グラムから2,000グラムに増加し、感染症の併発もなく退院できました。しかし、このように命を救うことにつながるケースは多くありません。だからこそ、こうした事態を未然に防ぐための予防行動が重要です。

「妊婦健診に通う」「妊婦に過度な労働をさせない」——こうした一つひとつの行動が、母子の命を守ります。ISAPHは、住民が自ら健康を守る力を育む支援を続けています。そして、家族を巻き込み、意思決定を支える支援や、地域全体で健康行動を支え合う仕組みづくりにも取り組んでいます。

行動の循環

この母子が暮らす村は、ISAPHの活動地域ではありませんでした。それでも支援要請の声が届いたのは、これまでに築かれた信頼関係があったからです。住民の健康行動を促すうえで欠かせない医療者が、住民の課題を自分事として捉え、寄り添って行動したことが、今回の支援につながりました。こうした姿勢は、住民が医療者をより信頼し、サービスを利用する行動へとつながります。そして、この行動の循環が健康行動の定着を促し、母子の健康を守ります。



退院時の乳児と両親

退院後も続く「つながりの支援」

退院後の育児支援も重要です。児はまだ母乳を飲む力が弱く、粉ミルク支援を併用しています。両親は毎月保健センターを訪れ、栄養評価や育児指導を受けています。こうした支援を通じて、両親の育児行動の定着や医療者との関係強化も期待されます。このように、命を救うことにとどまらず、医療者と住民をつなぎ、健康行動を後押しする役割も果たしています。



安心した表情を見せる乳児

あなたとともに育てる支援

次期プロジェクトでは、今回の村を含む郡全域への活動を予定しています。今後もISAPHは、賛助会員やiサイクル支援の皆さまからのご寄付をはじめ、行政や他団体と力を合わせながら、住民が自ら健康を守る力を育み、「誰ひとり取り残さない」人づくり・地域づくりを進めてまいります。

*ISAPHのパートナー団体であり、ペットボトルキャップを収集しリサイクル業者による買い取り金や、資源を再利用した商品の売上金を途上国の国際協力に寄付している。

取り残された人々へ 支援を届けるために

ISAPH
ラオス事務所

石塚 貴章



ISAPH
事務局

佐藤 優



ISAPH ラオス事務所が活動しているカムアン県には、ボラパー郡とナーカーイ郡の「最もアクセスが困難」と評される地域があります。ボラパー郡は、密林が茂る山岳地域で、雨季には車両が通れません。ナーカーイ郡は、船と二輪車を乗り継いで中心部から6時間以上かかる村落があります。私たちの活動理由「すべての人々の公平な健康」を実現するため、これまで対象とすることができなかったカムアン県の最奥、アクセスが非常に困難な地域で暮らす人々に向けて取り組みを拡大しています。

2024年度に外務省 NGO 事業補助金によって実施した調査から、ボラパー郡とナーカーイ郡の遠隔地で暮らす子どもたちは、ラオスの全国平均よりも高い割合で栄養不良に陥っていることがわかりました。資源に限りがある遠隔の村落で、保護者が子どもの栄養状態を知るためには、保健センターが提供する身体計測以外にありません。しかし、保健センターには、古くなった身長計・体重計しかなく、正しく子どもたちの身体を計測し、栄養状態を評価することが困難な状況にありました。せっかく身体計測をしても、適切な機材が無いために「問題無し」と誤診されれば、保護者らは子どもたちの食事や生活を見直す機会を失ってしまいます。

この事態を改善するため、2025年度より今井海外協力基金および公益信託アドラ国際援助基金から支援を受け、保健センターへ機材を提供する事業を開始しました。今年9月には、合計9カ所の保健センターに機材を届けることができました。もちろん、ISAPH

の支援はモノを提供するだけに留まりません。子どもの栄養不良予防の最前線で働く医療従事者に向けて、栄養指導の研修も併せて実施しています。今後は、機材を提供した保健センターを巡回しながら、身長計・体重計が適切に使用できているか、また子どもたちの栄養不良を改善するための活動が続けられているか、伴走して技術的な支援を続ける予定です。

私たちのような団体が、アクセスの困難な地域で活動することを避ける理由はいくつかあります。職員の安全確保のために費用がかかること、移動などにかかる費用が高額になりやすいことは、その中でも大きな理由です。しかし、今回の活動を通じて、そのような地域で暮らす方々の多くに支援が届いておらず、自身や家族の健康を考える機会がほとんどないことを痛感しました。ISAPHは、誰一人取り残さない社会に貢献するため、これからも取り残されやすい地域での活動に積極的に挑んでいきます。基金や財団からの助成金だけでなく、一人ひとりのご寄付が私たちの活動を支える礎となっていますので、どうぞこれからも可能な範囲で、ISAPHを応援いただけますと幸いです。



古くなった体重計を使い続けている



舗装された道はなく、アクセス困難



保健センターに身長計・体重計を提供

事務局からの報告

ともに歩む支援を、これからも

ISAPH事務局

ISAPHの活動を応援いただき、心より感謝申し上げます。

皆さまからのご支援は、マラウイやラオスで行う母子保健、地域の栄養改善、人材育成など、現地に根ざした取り組みを支える大きな力となっています。

ISAPHの支援は、物やお金を与えるだけの一方的なものではありません。

地域の人々が自ら考え、行動し、健康的な暮らしを続けていけるように、「ともに歩む＝伴走する支援」を大切にしています。現地の保健スタッフや母親グループ、行政担当者との対話を重ねながら、少しずつ地域全体の力を育てていく——それがISAPHの目指す国際協力のかたちです。

こうした日々の活動は、皆さま一人ひとりの温かい思いとご支援によって支えられています。

現地で笑顔が生まれ、希望が育っているのは、皆さまがこの取り組みを信じ、共に歩んでくださっているからこそです。

これからも地域に寄り添い、未来へとつながる支援を続けてまいります。

今後とも変わらぬご支援とご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。



ISAPHスタッフとお母さんたち
(上：マラウイ 下：ラオス)

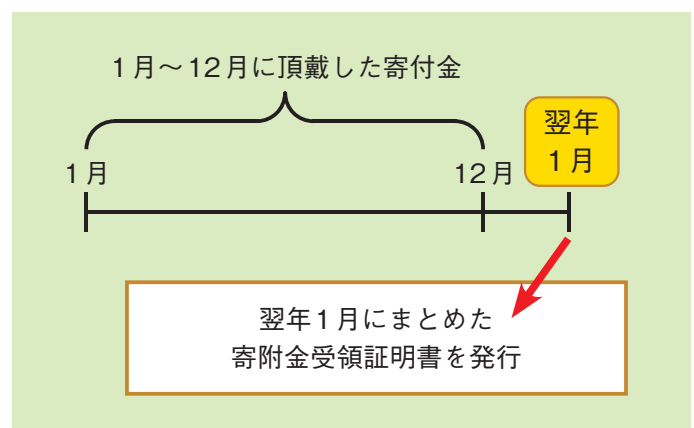
寄附金受領証明書の発行タイミング変更について

ISAPH 賛助会員年会費および寄付金をご入金いただいた方への寄附金受領証明書の発行タイミングが、2026年1月より変更となります。

これまではご希望に応じて都度お送りしておりましたが、今後は1月～12月にお受けした分を、翌年1月に1年分まとめて発行・送付いたします。

Syncable（クレジットカード／銀行振込み）を通じてご入金いただいた方へも、同様にお送りいたします。

なお、寄附金受領証明書の送付が不要の方は、お手数ですがISAPH事務局までご連絡くださいますようお願い申し上げます。



< ISAPH事務局 連絡先 >

T E L : 03-3593-0188

E-mail : jimukyoku@isaph.jp



2025.6-2025.9

PHOTO GALLERY



ISAPHの活動を通して、現地がどのように変わってきているのか、マラウイ・ラオスの現地職員の視点からレポートしてもらいました。



根拠を持って活動するため、子どもたちの身長や体重を計測



お母さんたちと離乳食を作るチムウェムウェ職員
(中央・大きなしゃもじを持っている人物)



チムウェムウェ・バンダ (フィールドコーディネーター)
マラウイ：リロングウェ県出身。ISAPHマラウイ事務所現地職員

ISAPHは、すべての活動で調査とデータに基づくアプローチを重視し、地域調査や啓発活動、人材育成を通して効果的で持続可能な支援を行っています。
参加した母親たちからは、「子どもの健康管理に自信が持てた」「体調が改善した」といった前向きな声が寄せられています。



ISAPH車両、日々のメンテナンスをしっかりと



雨季のぬかるみは、住民と力を合わせて脱出！



カムラン・カンタフェンサイ (ドライバー担当)
ラオス：カムアン県出身。ISAPHラオス事務所現地職員

2008年から車両管理と運転を通じて活動を支えています。仲間を安全に送り届けることで、安心して活動できる環境をつくり、住民の健康を守っています。活動を通して、地域の人々の協力的な姿勢を強く感じます。雨季に車が立ち往生した際は、村の人たちが総出で助けてくれました。ISAPHの活動は、地域とともに進める取り組みだと実感しています。



マラウイでは病気や痛みの原因を「呪術」と考える文化が今も残っています。日本でも以前は、虫歯の原因を「歯をかじる歯虫（しちゅう）が歯の中に住みついているからだ」と考えられていたそうです。このマラウイの考え方と近いものがあるのかな、と感じながら聞いていました。

編集後記

ニュースレターの企画にあたっては、毎号、職員全員で編集会議を開いています。今号でも、届けたい読者の気持ちを思い描きながら、表紙写真や記事、担当者を決めました。特集記事から4コマ漫画まで、毎回じっくり話し合い、内容を練り上げています。どの記事もそれぞれ推しですが、私のお気に入りには「PHOTO GALLERY」です。現地職員の仕事への思いや、地域の変化を感じてもらえるように工夫しています。

次号の企画に向けて、皆さまからのご感想をお寄せいただけましたら嬉しく思います。（安東）

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学 名誉教授
理事	江藤 秀顕	神山復生病院 病院長
理事	渡部 和男	元特命全権大使
理事	足立 基	聖マリア病院 国際協力診療部 部長
理事	佐々 優子	オリエンタルコンサルタンツ グローバル 部門長
監事	竹之下 義弘	東京六本木法律特許事務所 弁護士

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会・ご寄付をお待ちしております。

寄付 いつでも、いくらからでもお受けいたします。

賛助会員 法人 年会費：30,000円 個人 年会費：3,000円

※ご入会の方にはニュースレターをお送りします。
また、オンラインサロンに参加することができます。

【お支払い方法】

●クレジットカード Syncable
でのお支払い



●郵便振込 口座名 特定非営利活動法人ISAPH
口座番号 00180-6-279925

特定非営利活動法人ISAPH

【福岡事務所】

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422番地
聖マリア病院 国際事業部内 TEL.092-621-8611

【東京事務所】

〒105-0004 東京都港区新橋3-5-2 新橋OWKビル3階
TEL.03-3593-0188 FAX.03-3593-0165
E-mail jimukyoku@isaph.jp URL <https://isaph.jp/>

【ISAPHニュースレター 第52号 編集スタッフ】安東 久雄／村上 麻友子

社会医療法人
雪の聖母会



聖マリア病院

理事長：井手 義雄 病院長：谷口 雅彦

〒830-8543 福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322(代) FAX.0942-34-3115
URL <http://www.st-mary-med.or.jp>

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院

- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設

- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001 認証施設
- ISO 15189 認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設
(一般病院2 〈3rdG: Ver. 1.1〉)
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病（後）児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。